

## C-6 農村婦人作業衣の変遷(オク報)補助衣のI

農林省農技研 日浅 治枝子

目的 農村婦人作業衣は、躯幹部に着用する上下作業衣ならびに、かぶりもの、帯、前かけ、はきものに加えて、腕部、足部に着装する補助衣等によって構成される。今回は補助衣のIとして、全国各地の農村に長年目用いられてきた手覆い一般について、種類、形態、材質、変遷、変遷の要因等を明らかにする一方、今後の農業の変化発展に対応する、機能性ならびに防護性、近代性を備えた補助衣を開発する。

方法 昭和27年以降、全国農村地域100余ヶ所において、農村婦人の用いる手覆い類の実物調査ならびに、ゆきとり調査を行なった。

結果 現在、各地において用いられる手覆いは、うでぬきと手甲に大別される。うでぬきは、二の腕に着装されるもので、こて、てさしともよばれ、本来は、筒型あるいは平型の紐つき形態のものであつたが、近年、筒型のうでぬきの上下にゴムを通した形態が一般的に見られる。手甲は、手首から手の甲をおおうもので、その形態もまた平型と筒型がある。甲の部分は、半円形または三角形をしており、その先端に糸の輪をつけ、中指に通して着装する。手甲の名称は現在全国共通のものであるが、かつては、40種にわたる珍しいよび名があつたようである。この他、うでぬきの先に手甲をつけたような形態の、折衷型ともいふべき手覆いが全国的に多数みられるが、その名称は、うでぬき、ながごて、うでさし、長手甲、てあいなどともよばれ、本来のうでぬき、あるいは手甲の名称と同様のことが多い。一方、手覆いの一種である手袋は、近年ビニール製、または軍手類が一般化し、伝統的なものは殆んどみられない。